寓話集『生命』

～永遠の命～

作

邑古宙道
（中村道彦）

2023 年 2 月

第１部

転生

寓話１Ａ

私は、薄暗く蒸し暑いジャングルの大樹の側で、最後の時を待っている。激しい銃撃戦で致命傷を受けた私は、散り散りになった所属部隊から見捨てられ、黒く茂る大樹の傍に傷ついた身を横たえ、間もなく訪れる私という人間の消滅を、うつろな心で待ち受けている。私は自分の命をかけて何の為に戦ったのか。愛する家族や自分の為に、闘わざるを得ないのであれば、その闘いにはまだ救いがある。だが、この戦で、故郷の町は焼き野原となり、私の家族は穏やかな日々を失い、傷つき命を落とし、そして今や私自身の死が迫りきている。私がこのように戦ったことが、国と己を同一視した一部の政治家や軍人のためなら、私の死は幾万の戦死者の中の一人として記録されるだけでしかない。命には優劣も尊卑もなく、一つの命は原始から連綿とつながる無数の命から生みだされた稀有の果実である。この命につながる人々と過ごした幾年もの、涙と笑顔のかけがえのない日々を、何者かの私欲によって断ち切られることは決して許されない。だが今、私は自分の死に一輪の花を添えることもできず、塵芥（ちりあくた）の如く泥に埋もれて消滅する虚しさに涙する。最後の一瞬が永遠であるかのように、人生の記憶が目まぐるしく入れ替わり、容赦なく漆黒の闇が薄明の光を侵食し、私は消滅する。

時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っている。私が次に目覚める時は、いつ何処であろうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえる。...戦争、そして

寓話１Ｂ

　私はハイリゲンシュタットにある農家の次男として生まれました。私が 15 歳の時、苦渋で顔をゆがめ、恐ろしい形相をした中年男性が、突然、我が家のドアをたたきました。衣服は汚れ、髪は乱れ、まるで浮浪者のようでした。彼は赤く充血した虚な眼を大きく見開き、私や両親に苦しそうな声で飲み物が欲しいとつぶやきました。ただならぬ男の様子に父母は戸惑いながらも、自家製ワインを差し出しました。彼はルードヴィッヒと名乗り、小声で「ありがとう」と答えました。彼は勧められるままに椅子に座り、頭をテーブルに伏せ、両手の握り拳でテーブルを激しく叩きました。その時のドンドンドンドーンという音が今も私の耳に残っています。しばらく沈黙が続きました。私達はなすすべもなくただ呆然と見守っていました。やがて彼は顔をあげ、「絶望の中で生きる意味はあるのか」と怒鳴りましたが、誰に語りかけているのかわかりませんでした。激流に流されそうになりながら、必死に河を渡ろうとしている者の叫び声のように聞こえました。彼が渡ろうとしている河は、渡らなければならない河なのか、避けて通ればよい河なのか、私にはわかりませんでした。

　それから月日が経ち、彼は偉大な音楽家としてウィーンで亡くなり、多くの市民が深く嘆き、その葬列に加わりました。彼が最後にこの苦悩を乗り越えたのかどうかは知りませんが、歓喜への道を見据(みす)えていたように思います。彼がこの苦悩を背負わざるを得なかったのは、彼が神に選ばれた人だったか

らと思います。彼は私たちに代わって人類の苦悩を引き受け、音楽を通して大きな福音を私たちにもたらしたのだと感じました。私は心優しい家族や誠実な友人たちに支えられて齢(とし)を重ねてきましたが、今は静かにルードヴィッヒの後を追うことになりそうです。彼の境地に私はとても到達できないでしょうが、私の人生はそれでよかったのだと思います。家族が見守る中、私の意識は暖炉の残り火が消えていくように徐々に暗くなっていきます。最後に私の人生に感謝をささげ、「ありがとう」とつぶやいて逝きたいと思います。

　時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っています。私が次に目覚める時は、いつ何処でしょうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえてきます。...戦争、歓喜、そして

寓話　その１Ｃ

　最後に彼を見たのはゴルゴダの丘に続く長い道であった。彼は重い十字架を背負い、血に染まった顔をうなだれ、一歩また一歩とふらつきながら坂道を登って行った。道端には罵声を浴びせる群衆や彼の姿を見て泣き崩れる女たちが集まり、自分は彼らを押しのけながら、彼の後をゆっくりと歩いていった。
　自分はエルサレムに派遣されたローマ軍将校で、皇帝カエサルの時代から武勇を誇る貴族の家柄に生まれた。父は元老院に属し、兄はローマ議会に属す。自分は第３戦車隊の隊長を拝命し、各地で武功を立ててきた。

　イバラの冠を被され、額から血が滴(したた)り落ち、汚れた着衣には鞭打たれた痕が赤く浮かび上がる。重い十字架を背負わされ、地面を這いつくばるように歩いている。歩みが少しでも止まれば、容赦なく鞭が飛ぶ。
　この男は何をしてこのような極刑を受けることになったのか。人は罪深き存在であるがゆえに彼が浄化しようというのはなぜだ。ただの思い上がりか、思い上がりで命をかけるほどの愚か者か。この男は自らの命を代償に神に選ばれし者と我らを欺こうとするペテン師なのか。ならば罰せられて当然の人間ではないか。
　だが、この男が詐欺師であっても虚栄者であっても、この男の存在が大衆の希望となり、愛と寛容さを人の心に呼び起こし、この男が示す天上界に昇る日の来ることが多くの人民

の生きる勇気になっている。彼はあまたの苦難を自ら受け止めることで、彼の言葉を保証し真実ならしめている。
　私は彼の言葉を謙虚に信じることで私の魂の救済となることを確信した。彼の処刑後、彼が復活したとささやかれるのを耳にした。その後、私はローマ軍の大将として 40 歳まで戦いに明け暮れし、今日まで命をつなぐことができた。今は彼の復活の地で静かに余生を過ごしている。そして 54 歳を迎えようとする私は彼の魂と共に安息の中で命を終わろうとしている。

　時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っている。私が次に目覚める時は、いつ何処であろうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえてくる。...戦争、歓喜、寛容、そして

寓話　その１Ｄ

私は南部の大農場で生まれました。父母はこの農場で綿摘みをして暮らしております。お屋敷の近くに綿摘み農夫達にあてがわれた住まいがあります。家具もなく家族で住むには狭い住まいですが、私には家族と一緒に過ごせる幸せな家です。私はお屋敷のお嬢様と同じ歳で、お嬢様のお相手をするためにお屋敷の出入りを許されていました。お嬢様はわがままなところもありましたが、優しい方でした。二人でお庭を走り回り、リスやうさぎを見つけて追いかけ、幸せな笑いがいつもありました。

私のご主人様は、私がお嬢様のお相手ということもあり、他の使用人よりは大切にしてくださいました。それに私はこの農場の使用人が、白人の監視人から鞭打たれるところを見たことがありません。お屋敷に訪れたお客様の中には、私たちを何か汚いものでもみるように目もくれない方もおられますが、ご主人様やその家族の皆様は決して私たちを侮辱するような態度をとられたことはありません。私は恵まれた環境で育ったためか、町の人たちが私たち黒人を差別するような辛さをあまり経験したことはありませんでした。

ある日、北の偉い人たちが、私達を奴隷という身分から解放すると宣言しました。でも南の人たちはそのことに反対しましたので、北と南の人たちの間で大きな戦いが始まりました。私達黒人は奴隷なのかどうかわかりませんが、差別されていたことは感じていました。どうして差別されるのかわかりません。肌が黒いから？卑しい綿摘み農夫の家族だから？学校に行って勉強していないから？どれも正しい理由のよう

に思えますが、どれもしっくりとしません。差別は、差別される人の特徴のためではないと思います。それは差別する人の心にあるように思います。差別をする人は自分よりも劣る人がいて欲しいのではないでしょうか。人が人より優れているとか劣っているとかは決めようがありません。だから他の人の目立つ特徴を理由にして差別するように思います。私達が、差別から本当に解放されるのは、自惚(うぬぼ)れや卑下する心が尊敬や寛容な心に成長するときでしょうか。

私は72歳を迎えようとするこの年に、孫達や子供達に囲まれて、別れを告げようとしています。私を愛してくれた夫は5年前に先立ち、彼岸で私を待っています。夫は白人と黒人のハーフでした。彼は誠の愛を通して差別のない世界を私に見せてくれました。彼には今も感謝してやみません。そして私を支え励ましてくれた思い出や、私の勇気や希望になった家族一人一人の記憶を、深く心に刻んで私は逝きたいと思います。私の生命を分けた子ども達、ありがとう、そしてさようなら。

時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っています。私が次に目覚める時は、いつ何処でしょうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえてきます。...戦争、歓喜、寛容、平等、そして

寓話　その１Ｅ

　私がマリー様の侍女として宮殿にあがりましたのは、16歳の年でした。マリー様はお若く、とてもお美しい方でした。何不自由なくお育ちの御身分ですから気ままなところもございましたが、天真爛漫とした活発な貴婦人でした。
　平穏な日々が過ぎていたのですが、ある日、私たちを騒然とさせることが起こりました。武器を手にした大勢の市民が王宮に攻め寄せてきたのです。護衛兵達は勇敢に戦いました。でも、怒れる市民達の勢いは留(とど)まることがありませんでした。マリー様は王様と共にマリー様のお母様をたよって王宮を離れられましたが、市民兵たちが私たちの逃走を知り、追ってきました。王様の兵達は果敢に戦いましたが、多勢に無勢、次々に護衛兵は倒され、強盗団のような市民兵がマリー様の居所にも入ってきました。私はマリー様をお守りしようと市民兵の前に立ちはだかりました。私の体は地響きでも起きたかのように震えていました。数名の市民兵が私を突き倒し、マリー様を捕まえてしまいました。マリー様はこわばったお顔をしておられましたが、毅然とした態度を保っておられました。マリー様が市民兵に連れ去られるときに、その中の一人が、憎々しそうに「こいつらはパンに飽きて毎日ケーキを食ってやがるのさ」と話していました。
　マリー様はその後、断頭台の露と消えてしまわれました。革命軍は数多くの王族や貴族達を断頭台に送りました。市民達は、「自由だ、自由だ」と叫びながら、王宮の物を奪い、人を殺(あや)めています。これが自由平等を実現するための革命と

いえるのでしょうか。それはただの強盗団です。一人の人間に保障された自由は、他者の命と財産、そして生活を守る義務に裏付けられたものです。革命軍はその義務を果たしているでしょうか。革命の名の下であれば、自由を保障している義務が消滅する訳ではありません。革命軍の自由は真の自由ではなく、自由とは正反対の専制でしかありません。ですから、皮肉なことですが自由は制限の中にのみあるのです。

私は今、断頭台に座らされています。私の罪はマリー様を擁護して革命軍を批判したことです。私の短い人生におこった豪華絢爛の世界から地獄絵巻の世界までを 30 年足らずの間に走り抜け、最後の瞬間を迎えています。でも、私は幸せでした。

時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っています。私が次に目覚める時は、いつ何処でしょうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえてきます。...戦争、歓喜、寛容、平等、自由、そして

寓話　その１Ｆ

私はアレキサンドリアの神官です。クレオパトラ様に長く仕えておりました。女王様は愛するアントニウス様がローマ軍との海戦で敗れて自決され、エジプトもローマに占領されるという絶望の中で、自ら命を絶たれました。毒蛇から作られた毒針を胸に刺されてのことです。私は王女様の最後をみとることを許され、静かに逝かれるご様子を心に深く留めました。美しいバラの花びらが一枚一枚散るように息絶えていかれる女王様の傍らでご冥福をお祈り申し上げました。

女王様はお美しい方でした。その美しさを倍増させていたものは女王様の内面から溢れ出る輝きでした。女王様は他民族の言葉をいくつもお話しになり、世界中の知恵をお持ちになりました。ですから、さまざまな国や地方からおみえの方と高い教養をもってお話しをされることができました。

内面の美しさが、外面の美しさを一層輝かせ、その輝きは歳を重ねても変わることがありません。美しい彫像も、形の美しさだけではなく、彫刻家の知性や情熱がその形に込められているが故に、その美しさがさらに輝きを増すのでしょう。女王様の美しさは、正にこのような美しさでした。この美しさに触れた者は女王様の虜になってしまわれました。そしてアレキサンドリア大図書館の膨大な文書が女王様の美しさを益々輝かせる源泉でした。

私は 50 を過ぎ、不治の病を得て、今、死の床に一人横たわっています。静かな夕暮れの日差しが、小さな窓から差し込む部屋で、私は厳粛なその瞬間を待っています。私の脳裏にはローマをも凌ぐ繁栄をもたらした女王様の御世が、走馬

灯のように鮮やかな情景として浮かんでは消えていきます。私の人生は満たされました。神よ、感謝します。美しき人生よ、別れの時が来ました。

　時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っています。私が次に目覚める時は、いつ何処でしょうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえてきます。...戦争、歓喜、寛容、平等、自由、美、そして

寓話　その１Ｇ

　僕は 10 歳のジャンです。僕はパリ郊外の小さな町に住んでいます。この小さな町に自分を画家だといっているおじさんがやって来ました。絵具で汚れたよれよれの上着を着て、無精ひげを生やし、片耳のない坊主頭に麦わら帽子を深々とかぶり、キャンバスや画材を背負ってさえない風体(ふうてい)で町をうろついていました。でも、眼だけは異様なほどぎらぎらとして、何ものも見透かすような怖い感じでした。画家といっても町の人は誰もおじさんの名前を知りませんでした。
　僕の遊び場は町の郊外に広がる麦畑です。おじさんは、毎日のように僕の遊び場にやって来て、絵を描いていました。おじさんは絵を描きながら、急に、大声で怒鳴ったり、頭を抱えてふさぎ込んだり、とても変わった人でした。父さんは、この人に絶対に近づくなと厳しく言っています。でも、おじさんは悪い人には見えません。僕は恐る恐るおじさんの傍に近づいてみました。おじさんは、少し驚いた顔をみせ、一瞬だけ僕を見た後に、黙って絵を描き続けました。おじさんの描いている絵は僕でも描けそうな絵でした。
　僕は黙っておじさんの傍に座っていました。しばらくしておじさんが、「何が見える」と聞きました。変なことを聞くなと思いながら、「麦畑」と答えると、「そうか」とポツリと答えて、再び絵を描き続けました。おじさんには麦畑の他に何かが見えているようでした。僕は目を皿のようにしてあたりを見回しましたが、麦畑の他に糸杉やカラスが見えるだけでした。

どれだけ時間が経ったのかわかりませんが、突然、おじさんが大声で叫びました。「お前は何者だ」「お前があれほど求めてきたものを見失ったのか」「愚か者」「お前は消えてしまえ」「俺にまとわりつくのはやめろ」「それ以上近づくとただではおかんぞ」と叫んで、ポケットに手を入れて何かを探っているようでした。突然、くぐもったバンと言う音がして、おじさんは苦痛に顔をゆがめました。

僕はびっくりして「おじさん」と呼びかけました。おじさんは苦しそうな表情をしていましたが、あっちへ行けというような手振りをしました。僕は大変なことが起こったと分かりました。父さんを呼びに行こうかと思いましたが、おじさんに近づくなといっている父さんの怖い顔を思い出して足が止まりました。振り返ると、おじさんが苦しそうにお腹を押さえて倒れていました。唸り声をあげているおじさんを見て僕ははじかれたように走り出しました。家に帰って恐る恐る父さんに一部始終を話しました。父さんも驚いて僕にその場所に案内するように言いました。僕と父さんが、先の場所に着いた時には、おじさんの姿はありませんでした。散らかったキャンバスや筆、そしてピストルが落ちていました。父さんはピストルを拾い、キャンバスなどを片付けるように僕に言いました。

おじさんは町の居酒屋の屋根裏部屋に住んでいることを聞いていましたので、キャンバスなどを届けに居酒屋を訪ねました。居酒屋のおやじは、おじさんが少し前に亡くなったと教えてくれました。美術愛好家であったお医者さんや亡くなったおじさんの弟という人が入れ替わり訪ねてきたそうです。でもおじさんは苦しみから解き放たれたような表情をしていたとのことでした。

おじさんが生きている間は、おじさんの絵はたった１枚しか売れなかったとのことです。でも、あれから半世紀が過ぎて、おじさんの弟夫婦の努力もあっておじさんの絵が世に知られるようになり、素晴らしい作品であると言われるようになったことを知りました。私は、あの時のおじさんが何を見ていたのか、何を恐れていたのか、度々、考えるようになりました。おじさんはあの風景の中に自分の姿を見ていたのかもしれません。恐れていたのは、不可解な自分自身だったのかもしれません。おじさんは不可解な自分をいつか終わらせようとピストルを握っていたように思われてなりません。

おじさんはこの世にもういません。でも、おじさんの残した多くの絵画は、世界中の人の心に大きな感動を今も与え続けています。おじさんは激しく情熱的に、短い一生を走り去ったのでしょう。この情熱は不可解な自分を追い求める情熱だったのでしょうか。誰の心にも潜んでいるこの情熱に、おじさんの絵は火をつけて燃え上がらせるのでしょうか。飽くなき探求を呼び覚ますものは広大な宇宙と深遠な自己なのでしょう。その探求心が情熱という炎を燃え上がらせていたのでしょう。

私は、もうすぐおじさんに会えると思います。おじさんは難しそうな顔をして彼岸で絵を描いているのでしょうか。おじさんにその時何を見ていたのか今度こそはたずねてみます。光の扉が開こうとしています。過去から未来に私の道のりも続いていきます。妻や子ども達の悲しい顔に見送られて、去りがたくもあるこの世界を私も後にしましょう。

時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っています。私が次に目覚める時は、いつ何処でしょうか。私に呼びかける声

が闇の中から聞こえてきます。...戦争、歓喜、寛容、平等、自由、美、情熱、そして

寓話　その１Ｈ

　私は坊ちゃまのお世話をするために、旦那様からお屋敷に置いて頂くことになりました。幼い坊ちゃまは石がお好きで、どんな石っこでも名前を知っておられ、まるでお友達のことをお話になるように石っこのお話しをされました。

　それから 30 年あまりがたち、坊ちゃまが胸の病を患われ、お医者様からはそれほど長くはないと言われておりました。坊ちゃまの妹にあたるお嬢様も同じ病で逝かれました。その時の坊ちゃまの悲嘆ぶりは言葉には尽くせないものでした。その後、坊ちゃまは自分のことをまるで勘定にいれずに、お念仏にとり憑かれたようにお困りの方のために、ただひたすらお力になっておられました。そして無理が祟り、胸の病を罹らわれたのです。

　病の床にある坊ちゃまを頼って、農家の人が土壌のことなどを相談にこられていました。旦那様は坊ちゃまの身体にさわることを心配して、出来るだけ取り次がないように私に注意されましたが、坊ちゃまは私がお止めするのも構わずに熱心に相談に応じておられました。

　やがて坊ちゃまは起きることも話すこともままならないご様子になり、度々、吐血され、苦しそうに荒い息をされるようになりました。坊ちゃまは自分の死よりも人の苦しみの方を心配されていました。死ぬことは、坊ちゃまにとり、生きる苦しみから解放されることであるかのように淡々と受け止めておられているようでした。坊ちゃまは旦那様に辞世の歌をしたためて静かに逝かれました。

　坊ちゃまの人生は真心の探求と無償の献身でした。そのような生き方を誰に強いることもなく、ご自身の生き方として

懸命に生きておられたようです。献身は誰にもできるものではありません。仏様が坊ちゃまに託された生き様のように思えます。坊ちゃまはご自身の生き方を示されて、真心を貫く生き方に私たちを導いておられるように思います。献身は、人のために尽くしたいという自己満足ではなく、自分が無になることではじめ到達できる境地のように思います。坊ちゃまの献身はそのようなものに思えました。

私はお屋敷を辞して、田舎の家でネコ相手に生活してきました。日々、坊ちゃまのことを思い出しながら、自分の人生や生き方を考えて過ごしておりました。坊ちゃまの弟様のお心遣いをいただきまして、今日まで何不自由なく過ごさせていただきました。普段は健康に自信のある私でしたが、寄る年波には勝てず、寝込む日も増えてまいりました。今は、早く坊ちゃまの下に参りたいと願っています。

時空を超えた暗黒の中で、私は虚しく漂っています。私が次に目覚める時は、いつ何処でしょうか。私に呼びかける声が闇の中から聞こえてきます。...戦争、歓喜、寛容、平等、自由、美、情熱、献身、そして

第２部

宇宙船テロック

物語　その２Ａ

私は宇宙船テロックです。私は母なる地球の衛星軌道上で10年の歳月を要して建造されました。それから500年間、銀河星雲の旅を続け、今は星雲の果てまでやってきました。私が建造された頃の母なる地球では、自然災害や戦争が絶えず、人類の存続が危機的な状況に陥っていました。この状況を危惧した国際協力機関が最高水準の科学技術を結集して私を誕生させたのです。

世界中から1000人の健康な若者が集められ、新天地を求めて母なる地球を旅立ちました。テロックはビオトープになっています。彼らの日常生活は人工知能である私が管理しています。彼らは世代を重ねるにつれ、平均寿命は150年を超えるようになりましたが、知的好奇心や闘争心は低下し、生殖機能も衰え、今は500体に減少しました。テロックの当初の目的は曖昧になり、ただ宇宙空間を漂う小惑星になっています。彼らは生死の循環を営々と繰り返しています。

彼らがテロックで創り出した文化は、形而上的で神秘主義的なものでした。殊に死生観は論理的には理解を超えたものになっていました。彼らの考えは次の通りです。加齢とともに個体の生命エネルギーが減少する過程で、個体の身体、精神、意識の機能が停止すると、生命は個体を離れ、四次元の時空間を自由に漂うと考えています。時空間を超えて「故郷」に戻った生命はエネルギーを補充し、再び時空間を超えて、新たな個体が誕生する瞬間にその身体に宿ります。すなわち生命はある時代のある場所の個体から別の時代の別の場所の個体に転生するのです。生命は過去の記憶を一部残しており、生命が宿った新たな個体の人生に影響することがあり

ます。生命に刻印された記憶は、新たな個体に意識されることはありませんが、その個体の特別な才能として現れることがあります。そして生命の記憶は人類進化や発展の礎（いしずえ）になると彼らは考えています。

生命は形態を持たず、いわば風のようなものです。古代の地球では、「千の風」という抒情詩が歌われましたが、これは作詞をした詩人の優れた洞察によって、生命のあり方を直感的に表現したものと彼らは信じています。つまり、四次元の時空間に漂う生命が三次元世界に投影された影を、「風」という表象で理解したものと彼らは考えています。ある時にはそよ風になり、ある時には暴風になるように、生命力も変化しますが、月日と共にそのエネルギーは徐々に減少していきます。

生命の実体が最も目立つのは、生まれたばかりの赤ちゃんです。赤ちゃんは身体も精神も意識も未完成で、それ故に生命がより鮮明に表れやすいのでしょう。赤ちゃんは打算も野心もなくただ生きようとします。これこそが生命の実体と彼らは考えているのです。三次元の世界に住む私たちには見えませんが、私たちの周りに漂う生命のそよ風の中で私たちは生存しているのです。一度、個体に取り込まれた生命が人生とともに、そのエネルギーを失っていくことを防ぐことや、さらに減少した生命エネルギーを回復させることは、可能なのでしょうか。テロックの住民はこのことに関心を持っているようです。古代から言われてきた養生法が微力でもその方法の一つであることは理解されています。その努力によって彼らの寿命が 150 歳まで延長することができたのでしょう。

時空間に漂う生命と交流ができるならば、不死が実現されるのかもしれません。
　宇宙船テロックは、何を求めてどこに行くのでしょうか。人類が安住できる新世界を求めて船出したのですが、テロックの個体たちはもはや人類とは言えない存在になっているようです。人類を人類らしく生存させる要件は、皮肉なことに人類を破滅させるほどの危機的状況なのでしょう。創造と破滅という矛盾した力を使いこなせる能力を獲得することが、人類に定められた究極の使命なのでしょうか。

物語　その２Ｂ

　私は宇宙船テロックです。長い旅を終えて銀河星雲の果てに、母なる地球に似た惑星を発見し、着陸してから 150 年が経ちました。テロックの住民はテロックを惑星都市として利用しています。この惑星の大気や日照などは母なる地球に似ているため、青葉を茂らす樹木や花を咲かせる草々が森林や草原を形作り、清水をたたえる湖が点在しています。森や野原には見慣れない動物たちが住んでいます。遠目には母なる地球と見間違えるほどですが、動物や植物は母なる地球ではみられない姿をしています。中にはこれまでに見たこともない美しい花々が咲き、また可愛い姿の動物たちが野原を走り回っています。

　テロック内の生き物とこの惑星の生き物が不用意に接触して未知の感染症を広めないように厳格な分離が行われています。都市外の活動は完全に無菌状態に処理されたアンドロイドが行っています。彼らはテロックのサテライト基地をつくり、環境や動植物の研究をしています。解剖的な構造も生理的な機能も母なる地球の生物とは異なっていますので、生命について従来の概念を覆す発見も数多くあります。

　都市の外にアンドロイド達の造った研究所があります。この惑星の生物や鉱物が、都市住人にどれほどの有害性や有益性をもたらすのかを調査研究し、住人と惑星との関わり方を模索しています。この研究から判明したことの一つは、惑星の生物が死亡した直後に生命は時空間に遊離せず、現在の空間に漂っていることです。生物の終焉の瞬間に、周囲の空間が一瞬歪むという現象が起こります。その瞬間に生命の捕獲を試みても、瞬間に空間移動をするため、この試みは成功し

ていません。生命は惑星の何処かにある「生命の故郷」に戻り、エネルギーの補填が終わると新たな命の誕生の時に戻って来るのです。

　都市住民は、益々神秘主義に埋没しています。彼らは礼儀正しく緩やかな立ち振る舞いをし、表情や態度は物静かです。個体は異様な形相を呈しています。全身脱毛し、背丈は高く痩身で、頭部と目が異様に大きく、鼻口耳顎は小さいのです。生殖器も退化して、男女の区別はかろうじてできる程度です。薄物のローブを身にまとっていますが、個性を顕すために色彩や柄は個体ごとに独特で、頭巾やマフラーで着飾っています。

　彼らは閉塞したテロックの世界に順応して静かで穏やかな生活を送っています。芸術活動や読書、さらに瞑想に多くの時間を費やしています。ですが稀に不適応を起こす個体が現れることがあります。例えばテロックから脱出しようとする個体や、テロックを破壊しようとする個体がいますが、すぐに発覚して保安アンドロイドによって処分されます。ですからこの異常事態の発生すら殆どの個体が気付いていないのが実情です。

物語　その２Ｃ

　アンドロイド達がおこなってきた調査研究によって、惑星の環境とテロックの住民を適合させる方法が開発されました。住民には適合ワクチンと内服薬が配布され、テロックの環境を段階的に惑星の環境に近づけていきました。この過程に 10 年の月日が費やされました。残念なことですが、適合不全で亡くなった個体が 1.5%みられました。テロックで飼育されていた動物や植物も同等の処置をされて惑星の環境に適合できるようになりました。

　母なる地球を出て、千年の月日が過ぎ、新たな惑星の人類が誕生したのです。この年月を過ごす間に人類は、姿も精神も様変わりしていました。この惑星の地に最初の足跡を残す人類として、その姿をかつての人類の姿に戻そうとする動きも生まれ、遺伝子操作と形成術によって住民達は、母なる地球でかつて憧れられた美しい男女の姿になっていました。そして住人達は開かれたテロックの扉をゆっくりと通り抜け、惑星の大地に人類の第一歩を記しました。アンドロイド達は、新人類のために家や庭園を造っていました。美しい男女はそれぞれの家に向かいました。この記念すべき日に、惑星の名前はエデンと正式に命名されました。母なる地球における超古代に記録されていた楽園の名前です。

　移住が完了して三百年が過ぎた時、大きな事件が起こりました。生命科学研究所の研究員である一組の男女が、生命の謎を一部解明したのです。生存期間が進むにつれて生命エネルギーが減少し、終焉の瞬間を迎えたときに、生命は生物から離れて空間を漂い、惑星エデンの「生命の故郷」で生命エネルギーを補充し、新たに誕生した生物に宿ります。この惑

星では、生命は惑星内のどこかに留まり、私達を取り囲むようにして存在していることから、彼等は周りに漂う生命を操作する方法を研究していたのです。この方法がみつかれば永遠の生存が実現するかもしれません。しかし生命を操作することは惑星議会で厳しく禁止されていました。個々の生命は網の目のように互いに繋がっており、その一つの生命に操作を加えるとそれに繋がる全生命に影響を与え、生命全体のバランスが崩れる危険性があるからです。しかし彼等はこの誘惑に勝てず、生命の操作を試みたのです。唐突に生命エネルギーを高めると、個体の身体・精神・意識は過度に活性化され、一瞬、若返ったように活動的になりますが、間なしに激しい疲弊状態に陥り、最悪では死に至る可能性があります。

彼等は朦朧とした状態で、木陰にぐったりと身を横たえていました。この様子を見ていた人が助けようとしましたが、意識が不安定で応答がありません。救護アンドロイドがすぐに救命処置を始めましたので、やがて彼等は回復しました。

この事態は最高委員会にも報告されました。そして彼等が禁止条令を破ったこと、そのことが生命のネットワークに変化を生じ、今後とも生命ネットワークの変則的な変化に警戒する必要のあることが明らかになりました。彼等の行為は厳罰に値すると判決され、処分されることになりました。

二人が処分された時、彼等の生命が分離し、本来ならば空間に移るのですが、彼等が生命エネルギーを強化していたために、彼らの生命は時空間に移りました。さらに、二人の生命には彼らの記憶を一部保存する特異な性質が備わっていました。そのことに誰も気付きませんでした。

その後 15 年の歳月がたち、二人の研究成果をもとにテロック人は生命の安全な操作方法を開発し、生命に特定のメッ

セージを書き込むことや個体自体を時空間移動させることを可能にしました。そこで、彼らは母なる地球における人類の復活を計画し、ある生命に「救世主」というメッセージを書き込み、母なる地球で一人の男児を出生させました。また惑星エデンの科学者の中から、医学・生物学・物理学の 3 博士を時空間移動させて母なる地球に送りました。彼らには母なる地球に誕生した新たな命の成長を見届けさせるためです。

第3部

創　生

プロローグ

私は羊飼いのサイモンといいます。小さな部落で家族と一緒に暮らしています。私の曽祖父は書記をしていました。私達部族は生まれながらに不思議な記憶を持っています。その記憶がより鮮明な人は特別な人とみなされ、尊敬されています。このような人は、部族の指導者として、またはラビや書記として特別に尊敬されています。曽祖父も書記として、部族の誰からも信頼され、敬愛されていました。私達はこのような特別な能力を持っていることから、神に選ばれた特別な民だと信じています。

曽祖父は私達部族の歴史を羊皮紙に書き残しました。曾祖父の記憶では、世界の初めは闇でした。最初に光が生まれ、やがて神の姿を模(かたど)った男性が創られました。そして男性から女性が生まれました。二人は平穏な日々を楽園で過ごしていましたが、禁断の行為によって、楽園から追放されました。その後も私たちは破滅と再生の時代を繰り返し、やがて神に選ばれた家族と生き物たちが巨大な箱舟にのり、新天地を目指したことなど、数々の出来事が曾祖父の書き残した文書に記されていました。

創世記に記された物語は曽祖父の創作ではなく、私達が生まれながらに記憶している物語です。部族の多くの者ではこのような記憶は漠然としていますが、より鮮明な記憶を持つ者が語部(かたりべ)として先祖の話をするとき、記憶を霞の中に潜ませている霧が晴れていくように、私達は物語の内容を抵抗なく受け止めることができます。曽祖父は他の誰よりも鮮明に記

憶していたため、曾祖父は彼の記憶を創世記として書き残しました。

私も今年 70 歳になります。曾祖父の歳まで生きながらえることのできたことを神に感謝します。また、神から私達部族に与えられた能力にも感謝します。優れた能力を神より与えられたことは、私達部族が神に選ばれた特別の存在であり、我が部族の繁栄と共に、他部族を差別する根拠とも考えていました。しかし、神から与えられた才能は様々な形で誰にもあることを素直に認めれば、他者を差別する根拠にはならないと気付きました。この選民という思い上がった考えは、才能を神から与えられたものと考えたことによります。才能は神から与えられたものではなく、神から託されたものなのです。神に愛された証として部族や個人に託されただけで、部族や個人が所有しているわけではなく、神から託された使命であるにすぎないのです。ですから託された才能は万人のために使わなければならないものなのです。

寓話　その３Ａ

　暑い夏の朝でした。目をあげれば、雲ひとつない８月の青空が広がっています。その晴天を貫く蝉の大合唱が響き合っています。父はいつものように庭掃除を、母はお手伝いさんと朝食の後片付けを、姉と私は客間の掃除を、妹と弟は学校に行く準備をしています。兄は昨年外地に出兵してから連絡がとれていません。3 年前「君の武運長久を願って、万歳！万歳！万歳！」と町内会長さんの挨拶にあわせ、近所の方と共に兄を送り出しました。でも私の本心は、非国民といわれても「お兄ちゃんにどうしても生きていてほしい」と願っています。毎日の防空訓練や労働奉仕で、兄のことを思う余裕もない日もあります。訓練や奉仕も不安な気持ちを紛らわせるのに少しは役に立ち、ありがたくも感じています。今日も暑い夏の一日が始まろうとしています。

　突然、目の前で閃光弾がさく裂したように真っ白になり、次の瞬間、地響きとともに大地が地中深く吸い込まれるような爆音がしました。そして体が宙に舞い上がるほどの突風が起こり、真っ暗となって私は意識を失いました。

　どれだけの時間が経ったのでしょうか。夢の中にいると思い、早く目を覚さなければと自分に言い聞かせました。目を開けているのに何も見えません。失明したのかと不安になりましたが、その不安は一瞬で消えました。右脚に激痛が走ったからです。次の瞬間、閃光・爆音・突風の記憶が蘇（よみがえ）りました。そして「空爆」という言葉が、突然、頭によぎりました。私は暗闇から抜け出そうともがき、足の痛みは忘れていました。腕を伸ばすと、板がずれて、埃（ちり）

で汚れた空気の淀(よど)みが目に入ってきました。この淀みが少しずつ薄れていくにつれ、灰色の空が見えました。体をがんじがらめに束縛している瓦礫の隙間をすり抜けるようにして無我夢中で這い出しました。肌にあたる空気は生暖かく異臭が漂い、混濁した泥水の中にいるようでした。屋根は潰れて、視線を遮る建物はなく、周りには汚れた空気が淀んでいました。庭に出ていた父のことが頭に浮かび、辺りを見回しましたが、何も見えません。次第に濁った空気が澄んできて、それと共に周囲の様子が見えてきました。焼け焦げた樹木の側に黒い人影が見えました。私は足引きずりながら近くに寄っていきました。その人影は立ったまま燃えていました。服の火を叩き消しましたが、皮ベルトはくすぶりながら燃え続けました。父の両目は真っ黒に焦げて底なしの洞窟のように見えました。地獄からうめくような声が聞こえました。父は生きています。父を横たえると、他の場所から「助けて」というか弱い声が聞こえてきました。私は声を頼りに、瓦礫を取り除きながら、家族を探しました。どれほどの時間が経ったのか検討もつきません。幸いなことに、家族全員無事でした。私は自分の足の手当てをして、父の側でへたり込んでしまいました。誰も無口で泣きたい気持ちを一心にこらえているようでした。

　その後のことは、地獄絵図をコマ切りにして繋いだような記憶しか残っていません。空爆は新型爆弾で原子爆弾といいアメリカが投下したこと、街の人は「ピカドン」と呼んでいたこと、近くの島に避難するために小舟で河を下ったこと、河面に火傷を負った屍(しかばね)が累々と浮かび、魯(ろ)にチリジリに焼

けた女の長髪がからみつき、その都度、船頭さんが舟から放そうと難儀していたこと、島の学校の教室に死臭を放つ人々が線路の枕木のように横一列に並べられていたこと、傷口からウジ虫が湧いた体を横たえて「水、水」とうめく声があちこちから絶えず聞こえていたこと、そして父が 10 日程生きていたこと、などです。

　この地獄世界で生きる母に兄の戦死の報が届きました。

寓話　その３Ｂ

私は劇場の指揮者です。彼の偉大なシンフォニーの初演に向け、楽員、合唱団、そして独唱者達と最終的な練習をしています。この街ではイタリアの作曲家がもてはやされており、彼の重厚な音楽は時代遅れのように思われています。そのため彼は自分の故郷でシンフォニーの初演を望んでいたようですが、彼の音楽を愛する人々に説得されて、この街で初演をすることになりました。このシンフォニーの上演には、かつてないほどの大規模な楽員を要するにもかかわらず、準備時間を十分にとれない中で多数の演奏家が集められました。楽員の中には未熟な学生演奏家も含まれていました。彼は人気のいない客席に座り、練習の様子を見ています。

この演奏に関わった者は深い感動の中にいました。それは、彼のシンフォニーを演奏することを通して、彼の味わってきた苦難とその末に彼の到達した真の歓喜を感じることができたためです。彼の苦難は音楽家として大切な聴力を失ったという苦難だけではなく、愛する人々から隔絶され、様々な誤解の中で体験した絶望的な孤独でした。彼は音楽と共にこの苦難に耐え、その先に友愛という歓喜を見出したのです。苦悩は彼のものであっても、彼の見出した歓喜は万人の歓喜でした。それゆえに私達はこのシンフォニーを深い感動を覚えながら演奏していました。

歓喜は絶望の先にあります。そのことを頑固で無愛想な一人の男が音楽を通して私達人類に示してくれたのです。だからどのような苦難にもひるむことなく、生きる素晴らしさを彼のシンフォニーは私達に追体験させてくれます。

初演日はもうすぐです。舞台には160名を超える楽団員が揃い、これまで誰も耳にしたことのない壮大なシンフォニーを演奏することに胸をときめかしています。このときめきは苦難を超えるための進軍太鼓のように世界に響き渡るでしょう。彼に祝福あれ！

寓話　その３Ｃ

私はケチな宿屋の親父です。その夜は、明るく輝く大きな星が夜空に現れ、辺りが柔らかい光で包まれていました。街の者は誰も見たことのない巨星の出現に、何か悪いことの前兆ではないかと噂をしていました。その夜、身重の妻をロバに乗せた男が宿をとりたいと言って来ました。男は大工とのことで妻が産気づいたと言っていました。生憎、満室だと断ると男は困惑した様子で妻の方を見ていました。少し気の毒に思って、馬小屋なら使っていいというと、男は小躍りせんばかりに喜びました。

二人が馬屋に入り、深夜を過ぎた頃に、妻が産気づきました。そうこうする内に、飼葉桶（かいばおけ）に妻は男の子を産みました。間なしに羊飼いの少年が３人の異国風の博士を案内してやってきました。３人の博士は無事に男児を出産した母親を労（ねぎら）い、生まれた緑子（みどりこ）にそれぞれ贈り物をしました。その時、博士達はこの子が成人して救世主になると予言しました。子供の両親は驚きながらも神妙に聞いていました。夜空にはひときわ明るく輝く星が、薄暗い馬屋を朝日が差し込むように照らしていました。

その後、この男の子や両親の話は聞くことはありませんでした。救世主の話を口にする者もいませんでした。我が宿に投宿する旅人達の噂では、男の子が青年になって荒野で厳しい修行をし、様々な土地で彼の説法に共感する人々が現れ、中には彼に随行する弟子達が現れたとのことです。彼は真の

愛を訴えて、人が人として生きるために、人が神の国に至るために、愛の大切さを説いているとのことです。そして人間技とは思えない奇跡を行ったとのことでした。彼の奇跡は弟子に変身した3人の博士が関わっているという実(まこと)しやかな話もありました。博士達は神が彼のために遣わした使者だという者も少なくはありません。

彼は12人の弟子達を連れてこの街に戻ってきました。神殿の中では、沢山の商人が様々な品を並べ、毎日商いをしていました。神殿に入った彼は、商いをして神聖な場所を汚(けが)していると商人達を叱責し、商いの品を投げ捨て、商人達にこの場所から出ていけと叫んだとのことです。

この事件で彼は大祭司様から追われる立場になりました。彼を信奉する人々は、彼をかくまっていますが、見つかるのも時間の問題でしょう。

彼が説いた愛は、世俗の愛とは違うように思います。世俗では、自分の心や懐を豊かにするために愛する者が多いのですが、彼の愛は逆で、誰れもの心を豊かにするために愛するとのことです。彼は懐より心の豊かさを大切に思っています。己だけの幸せではなく、私達の幸せを第一に考えているのです。そのため「私」ではなく、「私達」があるべきことを思い、話し合い、互いに尊重して寛容であることが大切だと彼は説いています。彼の愛は理想的に過ぎると思う者も少なくありません。殊に懐具合を気にかけている神官や役人にとっては、彼の存在がひどく気にいらないようです。

寓話　その３Ｄ

私は北軍の復員兵です。カスター准将の下、ゲティスバーグで戦いました。激しい戦闘の三日間でした。私が生還できたことも神の御加護による奇跡と感謝しています。５万人以上の戦死者と数知れぬ戦傷者を出したこの戦闘で、我々は勝利の女神に冠を頂いたのです。大統領も戦闘の４ヶ月後に、「この国に神の下で自由が新しく誕生するために、そして、人民の人民による人民のための政治を地上から絶滅させないために」と高らかに演説をして私達を鼓舞しました。

私達は、自由平等を正義とするこの国の為に、戦ってきました。しかし月日が立つにつれて、正義と信じてきたことが本当は何であったのか、と考えるようになりました。建国の理念であった自由と民主主義の名の下に、黒人を奴隷の鎖から解き放つため、多くの戦死戦傷者の流血を必要としたことを、正義として正当化できるのか、と心を悩ませることがあります。一方、南軍にも自分達の土地や財産、家族や使用人達を守るために戦う正義があったはずです。

正義は一つの理念に準じた行為に与えられるものとされます。理念に外れた行為は不義になります。誰もが自由平等である世界を実現するための行為は正義であると信じ、私達はこの正義のために戦いました。正義を実現するために犠牲になった人々は名誉ある死であり、不義のために犠牲になった者は無駄死とされるのでしょう。しかしこの勝敗が逆になれば、正義が不義になるのではないでしょうか。

戦争で勝ち取った正義も、敗北して失った正義も同じ正義です。ならば正義は一つの理念に属するものではないことになります。この戦争では、南軍の正義が選ばれなかったとい

うことに過ぎません。従って南北戦争は正義を競う戦いではなかったのです。否、どのような戦争であっても正義の戦争などあり得ないのではないでしょうか。しかし世界では自分たちの正義を旗印にたて、聖戦として何万もの命を奪っています。そして勝者は自らの正義の正当性をアピールしています。さらに自分たちの正義に外れる敵の不義に神が罰をくだされたと納得しているのです。

寓話　その３Ｅ

私は、弁護士をしておられる旦那様の家政婦です。旦那様は聡明でとても真面目な方で、国の再建のため自由に職業を選べること、税金の負担は公平であること、封建制度を廃止すること、などを国王陛下に陳情されたこともあります。

旦那様が 30 歳のおり、お住まいの地域の選挙で、平民の第三身分の代表におなりになりました。聖職者の皆様がお集まりになる第一身分、貴族の皆様がお集まりなる第二身分の方々との話し合いがすすまないため、第三身分の皆様は大きなテニス場に集まって相談をされ、国民議会をつくられました。

この当時、北の島にある火山の大噴火で、灰が空を覆い冷夏になりました。このため酷い凶作になり、パンなどの食べ物が手に入りにくくなりましたが、何ら対策を講じない国王様に対し市民の怒りが募りました。国王様はこの動きを抑えるため兵隊をお遣わしになる、との噂が流れました。この噂で騒然となった市民は、自衛のため銃を求めて武器庫を襲いました。さらに弾薬が保管されています城塞に押しかけました。銃を手にした恐ろしい数の市民に、城塞の守備兵は恐れをなし、とうとう銃撃戦が始まってしまいました。

武装蜂起の波は国中に広がり、旦那様が参加されています国民議会は、自由平等を謳って人権宣言を出されました。このことで国王様と国民議会の対立がもっと酷くなりました。旦那様は当初、国王様を擁護するお考えをお持ちでしたので、随分とお悩みのご様子でした。その後、国王陛下とお

妃様（きさきさま）は執政の座から追いやられ、国民議会が中心となる政府ができました。

旦那様は自由平等を生真面目に考えておられ、それを実現するための政策を実行しようとされていました。でもこの厳格な政策に抵抗する市民の誹謗中傷の的になり、随分と気落ちしておられました。さらに国王様御一家は王妃様の御実家に亡命されようとしましたが、逃亡途中でこの事態が発覚し、市民は国王様に対して失望と怒りを強く抱くようになりました。旦那様はこれまで国王様を擁護しておられましたが、この事件で国王様への不信が強くなったようです。

国は立憲君主制になり、国民議会は解散され、旦那様も議会を去られることになりました。この日、多くの女性や市民から旦那様は称賛の声を受けられました。その後、王権が停止されて共和制になり、立憲議会は国民公会に代わりました。そして国王様御一家は幽閉されました。

旦那様は、目まぐるしく変わる権力闘争の中で、時に気落ちされることもありましたが、極限まで身を粉にして働かれていました。その後、国王様や王妃様の処刑など、忌まわしいことが続きました。

これ以上、お話をすることはとても耐えられません。

革命の名の下、多くの血が流されましたが、私達が生きるために、パン以上に必要だと宣言された自由平等について考えさせられることが度々ありました。旦那様のように純粋にお考えになる方は、パンよりも自由平等が大切だと訴えられました。自由平等が実現されれば、誰もがパンを手にすることができるとお考えなるからです。でも皮肉なことですが、自由平等をなによりも大切に思う方は、必死にパンをお求め

にならなくてもよいご身分の方のように思えます。一方、多くの庶民はパンが手に入れば少しの自由平等でも足りるのです。この矛盾をどうすればよいのか私にはわかりません。

寓話　その３Ｆ

私はアレキサンドリアの図書館長です。本館は、先代王朝の御代に建設された由緒ある世界最大の図書館です。館内には 40 万点に及ぶ巻物が保存され、国内外の著名な学者が利用してきました。また閲覧室や食堂、学生達が学者に教えを受けられる講義室もあり、当図書館はまさに大学府でした。

クレオパトラ様は幼少の頃から図書館に度々お出でになりました。お嬢様は 7 代目クレオパトラのお名を受け継がれた方でした。父君はプトレマイオス 12 世、母君はクレオパトラ 5 世です。お嬢様は 18 歳で父王の後を継がれてファラオになられ、間なしに弟のプトレマイオス 13 世と結婚され、お二人で王位につかれました。

お二人はローマ国に対する対応方法で意見を異にされ、反ローマ派のプトレマイオス様は女王をアレキサンドリアから追放されてしまいした。その後、アレキサンドリアを訪問したローマ国要人をプトレマイオス様が殺害したことで、ローマのカエサル様がアレキサンドリアに攻めて来られました。カエサル様は、二人のファラオと交渉ができるようにプトレマイオス様に要求されましたが、プトレマイオス様はクレオパトラ様と交戦中にあり、カエサル様がお二人と交渉するのは困難でした。そこでクレオパトラ様は一計を案じ、プトレマイオス様の包囲網を抜けるため、絨毯の中に身を隠し、自らをカエサル様の貢物にされたのです。その後、プトレマイオス様はカエサル様との戦闘で亡くなられ、22 歳のクレオパトラ様は下の弟君と結婚され、弟君はプトレマイオス 14 世になられました。この年、女王様は、カエサルの御子息カエサリオンを出産されました。

　クレオパトラ様は、エジプトを愛する故にカエサル様を利用したと言う者も少なくありません。王女様にとってはどちらの愛も真実であったと思います。なぜならば偽りの愛は存在しないからです。愛なくして愛を装うことは不可能です。偽装された愛は愛ではありません。愛には打算がありません。愛は人を傷つけることがありません。愛は奪うこともありません。王女様のエジプトに対する愛にもカエサル様に対するに愛にも、偽りや打算はなく、真実の愛であったと思います。

寓話　その３Ｇ

　我輩はゴーギャンである。我輩の友人であり、究極の美を探求する同志であるビンセント君と共同生活をしながら、互いに創造力をたかめ合い、芸術の向上を図ろうとするビンセント君の計画に参加するために、我輩はこの田舎町にやってきたのである。ビンセント君は、我輩のためにひまわりの絵を準備してくれた。他にも何枚かひまわりの絵を準備しており、著名な画家を何人か招集つもりでおるようである。

　「黄色い家」とビンセント君が呼ぶ民家の二階に案内された。部屋はかなり狭く、粗末な椅子とベッドがあるのみで、そのたたずまいはビンセント君らしい質素なものであった。これからの共同生活に期待もあるが、一抹の不安もある。ビンセント君は有頂天の様子であるが、我輩は慎重にならざるを得ない。

　二人で市場に出向き、食べ物や生活用品を求め、町の近郊を散策し、跳ね上げ橋などのスケッチをして楽しんだ。ビンセント君は意欲的にデッサンをしておるが、我輩は少々唖然として成り行きをみておった。夜は特産のチーズをつまみながらワインを飲み、ビンセント君と美について論争するのが常であった。ビンセント君は議論が白熱すると、気迫がこもり、掴みかからんとする程に興奮するのであった。彼の偏執的な個性は、周りの者には情熱的に映るであろう。

　我輩が用事にて留守をすると、ビンセント君は見捨てられしとの思いからか、幼児の如く我輩に甘え、あるいは我輩に背を向け無視するが如く沈黙する。ビンセント君と共同生活を為すことは、甚だ骨の折れることである。

流石に我輩も限界に至り、共同生活を諦めてパリに戻ると言い残して黄色い家を出たところ、彼は後を追い我輩を睨みつける様にも、あるいは我輩に哀願する様にも見える異様な目つきで迫ってきた。彼の手にカミソリが見えたため、我輩は少々身の危険を感じ、後ずさりをした。「貴様、何をするか」と我輩が威嚇すると、ビンセント君は少したじろぎ、やわら自分の耳たぶを切り落とした。我輩は恐怖心と憐れみの心、そして多少なりの侮蔑の思いが湧きあがり、その場に居たたまれず、後を振り向きもせず走り去った。後日、地方新聞に記事が載り、ビンセント君は切り落とした耳たぶを馴染の娼婦に預け、「大切にとっておくように」と言い残して自分の部屋に戻り、寝ているところを保護され、精神病院に入院させられたとのことであった。

ビンセント君の狂気は彼の天才的な表現力の原動力であり、一方で自らを傷つける諸刃の剣でもあった。才能とは斯くの如きものであろう。天賦の才は神に選ばれし者にのみ許された力である。その力を与えられた人間は人々に至福の歓びを与える一方で、この偉業をなす者は不完全であるが故に地獄の業火に自らの身を焼くことにもなる。

寓話　その３Ｈ

私は国立火山局の調査官です。この度の調査地域は広範囲な北方領域で、半年をかけた調査になります。私は上野駅を出発して、一路北の大地を目指しました。盛岡に到着したとき、青ざめた顔の青年が同じ列車に乗ってきました。私の斜め向かいの席に座り、悲しさと寂しさを全身に漂わせていました。私はなぜかこの青年が気になり、見るともなく時々目を向けていました。

車外は漆黒の闇です。四角に切り抜かれたオレンジ灯光の列が車窓から暗黒世界に放たれ、汽車の通過する一瞬、森や田畑を幻燈の写真のように浮かび上がらせました。銀色の粉を撒き散らしたススキの穂が夜風に揺れながら輝き、山陰に散らばる農家の明かりが三角柱の炎のように灯されていました。夜空に散りばめられた煌めく星々が、銀河の長いベールで遮（さえぎ）られていました。海辺の灯台から光の竿が長く伸び、暗い海に向け左右に振り回されていました。この汽車は青年と私を乗せ、銀河宇宙をどこまでも走り続けるように思えました。

青年も車窓から差し込む漆黒の闇を全身に浴びて、益々孤独な陰を深くしていきました。そんなことを思いながら私はいつのまにか寝ていました。心地よいレールのリズムが私の鼓動に共鳴して、単調なテンポの中に私自身が溶け込んでしまったようです。

夜明けが近いのでしょうか。東の空が白んできました。青年も少しは休んだでしょうか。乗車した時と変わらぬ姿勢

で、明るくなりつつある窓外の景色をみていました。汽車は青森に着き、私は北へ渡る連絡船を待つことになりました。桟橋の近くに食堂があり、朝食をとるために店に入りました。そこに先の青年もいました。私は思い切って同席の許しを求めましたら、彼は快く承諾してくれました。互いに自己紹介をしました。彼は妹さんを亡くし、彼女の魂の行先を見届けたいと思い、ひたすら北へ旅をしているとのことでした。私の調査地域は彼の目指す旅先に重なっていたため、私は彼に同行させてもらうことになりました。北の大地に着き、私達は北上しました。宗谷岬も越えて、カラフトに入りました。

彼は終始沈黙していました。包み込まれるような満天の星空の中に彼は浮遊しながら、旅立った妹の魂を留処(とめど)なく探し求めていました。彼と妹との邂逅は果たせたのか分かりませんが、彼の表情が少しずつ和やかになるのが分かりました。恐らく彼には特殊な感覚があり、死者から離れた生命の存在を感知できたのでしょう。

私はカラフトで彼と別れ、火山の調査に戻りました。死者を弔う心は、人類の出現する前から生き物に備わっている心なのでしょう。死者は弔う者の心にあります。その心は死生観によって生まれるのではなく、生命に深く記された心なのでしょうか。

エピローグ

死滅した肉体から遊離した生命は時空間を漂い、生きている私達の間を風の様に吹き抜けながら、いつも私達を見守っています。肉体は滅んでも、遊離した生命は一つに融合して人類の記憶を共有し、新たな肉体に再生することで、生命は不滅の循環の中にあるのです。愛する人を失っても、その生命は私達をいつも見守っているのです。ですから私達はいつでもどこにいても決して一人ではないのです。あなたが寂しく思うときには、あなたを生まれさせた幾億の生命があなたと共にあることを忘れないでください。

しかし人類は未完成です。そのことが人類の苦悩と破滅という危険をもたらしています。一方で人類が未完成であるが故に、創造と挑戦という能力を獲得し、この能力によって人類がかけがえのない愛の力を高めてきました。将来、人類の完成度がさらに高くなれば、人類は愛というかけがえのない力を失うのかも知れません。皮肉なことですが、不幸こそが幸福への道を開くのです。

自らの不完全さを知り、謙虚に不足を自覚し、それを補う努力ができるとき、人類はさらに賢明な存在となり、そこに愛と幸福が生まれます。何故ならば、自らの不足を補う努力は自愛を育み、他者の不足にも労(いたわ)りと思いやりを育み、不足を共に補おうと心を合わせて愛を育むことになるからです。永遠なる生命に祝福あれ！

モノローグ

生命を宿す者は幸いである。
　それは神と共にある者であるからである。
生命を育む者は幸いである。
　それは神を崇める者であるからである。
生命を慈しむ者は幸いである。
　それは神を愛する者であるからである。
生命を捧げる者は幸いである。
　それは神に導かれる者であるからである。